

令和 4 年 6 月 2 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12549

研究課題名（和文）中国遼寧地域の漢代墳墓研究 新出土資料と20世紀前半期発掘資料をもとに

研究課題名（英文）The research of the burial system of the Han dynasty in Liaoning region, China :  
Based on articles excavated in the recent years and the first half of the 20th century

研究代表者

石川 岳彦 (Ishikawa, Takehiko)

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・研究員

研究者番号：70419844

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中国遼寧地域における漢代墳墓の内部構造と主たる副葬品である陶製明器（副葬用土器）に関して、その変遷過程と特質を明らかにすることを目的に、以下の三つの調査を実施した。調査①：現在までに報告されている墳墓に関するデータの集成と考察。調査②：20世紀前半期に発掘された東京大学文学部考古学研究室所蔵の遼陽周辺漢代墳墓出土資料の整理調査。調査③：前記の東京大学所蔵資料との比較検討のための国内外機関が所蔵する関連資料の実見調査。以上の調査を実施することによって、遼寧地域における漢代墳墓の実態を把握することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、日本列島や朝鮮半島を含む東北アジアの古代文化研究における重要地域である中国遼寧地域の漢代墳墓研究を前進させる学術的意義をもつ。また、本研究の成果は、日本国内に眠る20世紀前半期に蒐集された中国関係考古資料の学術的活用と社会への公開という点においてもその意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is elucidation the transition process and characteristics of the burial system of the Han dynasty in Liaoning region of China. To achieve this purpose, I conducted three surveys. Survey ①: Collection and consideration of data on tombs in Liaoning region. Survey ②: Investigation of burial pottery from Liaoyang, which was excavated in the first half of the 20th century and is owned by the Faculty of Letters, University of Tokyo. Survey ③: Investigation of related burial pottery in domestic and overseas institutions. Through these three surveys, I was able to clarify the burial system of the Han dynasty in Liaoning region.

研究分野：東アジア考古学

キーワード：中国 遼寧地域 漢代 墳墓 陶製明器

## 1. 研究開始当初の背景

中国漢代の墳墓と副葬品に対する考古学的研究は、当時の社会や文化を解明する上で大きな役割を果たしている。本研究は、東北アジア諸地域への漢文化の拡散を考える際の重要地域であるにも関わらず、これまでほとんど解明されてこなかった遼寧地域(中国東北地方南部)の漢代墳墓の様相を実証的に明らかにする試みである。

### A) 本研究の対象地域の地理的・歴史的位置

本研究の対象地域である遼寧地域は、中国中原地域と朝鮮半島の間接地帯にあたる。遼寧地域が中原王朝の勢力下に入るのは、春秋戦国時代の燕国のこの地域への進出によってであった。その後、遼寧地域は秦代を経て漢代にかけても、春秋戦国時代に燕国により設置された遼西、遼東両郡の郡県体制が維持され、漢代以降、朝鮮半島北部に設置された楽浪郡、帯方郡を通して朝鮮半島と関わりをもち、その影響は日本列島にも及んだ。そのため、遼寧地域の漢代については墳墓とその出土遺物を中心に、朝鮮半島さらに日本列島の古代文化との関連から注目する研究者がかねてから多い。

### B) 本研究の調査・研究史的背景と核心となる学術的「問い」

遼寧地域における漢代墳墓の調査は19世紀末、日本の大陸進出とともに日本人研究者によって始められ、20世紀前半にかけて遼東(遼寧地域東部)を中心に発掘調査が行われた。1941~44年には、遼東郡の郡治「襄平」に比定される遼寧省遼陽周辺の漢代墳墓の調査が東京帝国大学の原田淑人らにより実施され、戦後、簡単な報告書が刊行されている〔駒井和愛 1950『遼陽発見の漢代墳墓』〕。この調査では、複数の墳墓から多数の副葬品が出土し、それらの出土品が東京大学文学部考古学研究室所蔵の遼陽周辺漢代墳墓出土資料(以下、「東大所蔵資料」と記す)である。東大所蔵資料は、大部分が陶製明器(副葬用土器)であり、そのほとんどは報告書に収録されず、未報告である。

第二次大戦後は中国人研究者の手で調査が行われている。20世紀前半期までに調査されてきた遼東のほか、遼西(遼寧地域西部)でも漢代墳墓が調査され、遼寧地域における多様な内部構造の墓の存在が判明している。しかし、2000年代までは中国中原地域に比べてこの地域の調査報告数は少なく、墳墓の編年をはじめ、体系的な研究はほとんど進んでいない。

しかし近年、状況が変化している。中国の経済発展にともない、遼寧地域の漢代墳墓の発掘調査、報告が急速に増えている。つまり、墳墓の調査報告を集成し、そのデータを基にして、遼寧地域の漢代墳墓研究をより深化させることが可能な状況になったのである。ただ、いくら調査報告が充実したとはいえ、陶製明器に関して、報告から得られる情報は限られる。報告の記載のみからは知りえない、詳細な観察に基づく知見を得るためには、東大所蔵資料をはじめとする実物資料の実見調査を行う必要がある。

本研究の核心は、このような状況を踏まえ、現在までの墳墓発掘調査報告データの集成・考察結果と東大所蔵資料をはじめとする陶製明器の実物資料の詳細な実見調査結果を総合し、これまで明らかにされてこなかった遼寧地域における漢代墳墓の様相がいかなるものなのかを、総合的かつ実証的に初めて問う点にある。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、遼寧地域における漢代の墳墓の内部構造と副葬品の主体である陶製明器を対象に、それらの詳細な変遷過程と特質を実証的に解明することである。

この目的達成のために、1) 現在までの漢代墳墓発掘調査報告データの集成・考察と、2) 国内外での実物資料の実見調査を二つの大きな柱に据え、それらの成果を総合させることが本研究の特色である。特に2)については、国内所蔵のものとしては最大規模の遼寧地域の漢代墳墓出土資料である東大所蔵資料の全面的な整理調査が中心となることを強調したい。中国漢代の墳墓出土資料、特に陶製明器の研究は、遼寧地域に限らず、調査報告を基にした研究が多く、資料の詳細な実見調査に基づく研究は、ほとんど存在しない。本研究で実施する東大所蔵資料の整理調査は、これまでの陶製明器の研究では触れられてこなかった陶製明器の製作技術の復元やその変遷といった漢代土器の製作技術論をも視野に入れた考察が可能であり、本研究の独自性が発揮される部分である。

また、本研究の成果は、遼寧地域の漢代墳墓研究を前進させるだけでなく、中国のそれ以外の地域の陶製明器研究に対しても、資料の実見調査に重きを置く研究方法の採用を促す点で、日本のみならず、中国における新たな漢代墳墓研究の開拓に貢献する。

さらに、遼寧地域の漢代墳墓と副葬品については、特に朝鮮半島の高句麗や楽浪郡等の墳墓への影響がかねてから指摘されており、本研究の成果は朝鮮半島におけるこの時期の墳墓とその

出土遺物の研究にも新たな視点を提供し、研究を進展させる契機となる。

### 3. 研究の方法

2. に記した1) 2) の具体的方法として、以下の三つの調査( )を研究期間に並行して実施し、上記の目的を達成する。

調査 遼寧地域における漢代墳墓に関する調査報告データの集成と考察

調査 東大所蔵資料の整理調査

調査 東大所蔵資料と比較検討のための国内外機関が所蔵する関連資料の実見調査

本研究の主調査は調査 である。調査 では遼寧地域の漢代墳墓とその内部構造、陶製明器について中原地域との比較を行いつつ、これらの編年を示し、地域の特徴を解明する。また、調査 で扱う東大所蔵資料の年代的位置を確定する。調査 では出土地遼陽がある遼東内陸部の陶製明器編年の精緻化を図る。さらに調査 で行う実物資料の詳細な観察によって判明する陶製明器の諸特徴については、調査 で新出土資料を含む遼寧地域各地出土の陶製明器との比較検討を行い、成果を調査 へフィードバックする。以上の戦略を用いて本研究の目的を達成する。

### 4. 研究成果

3. に記載した三つの調査による成果の概要を以下に記す。

#### A) 遼陽・瀋陽地域における後漢時代から三国時代にかけての墓制と陶製明器をめぐって

紀元前後から紀元後3世紀にかけて、遼東の遼陽・瀋陽地域では塋室墓と石室墓が多様な展開をみせた。紀元前後から1世紀代には単室の塋室墓が主流を占めるが、遼陽周辺では単室の石室墓も存在する。ただ墓の内部空間の構造からみれば、単室で墓室奥、すなわち被葬者の頭側に副葬品を配置する点で塋室墓も石室墓も同様であり、両者は構築素材を異にするのみで、構造的な連関性はきわめて強いことがわかる。

2世紀にはいると、引き続き単室の塋室墓がみられるものの、瀋陽地域では複数の室を並列に配置する塋室墓が出現する。一方でこの時期の遼陽地域においては石室墓が盛行するようになり、副葬品を配置する区画が独立した一室を形成する石室墓があらわれる。また石室墓においては、前室をもつ墓も出現する。このように、石室墓においても塋室墓と同様に墓室の多室化が始まる。塋室墓や石室墓に見られるこれらの現象は、当時、汎中原的に進んだ墓への前堂祭祀空間の導入と家族墓への志向のこの地域への移入としてとらえることが可能であろう。さらに、魏晋時代にかけて続くことになる石室墓内に壁画を描くことも、この時期から始まっている。

さらに3世紀には、2世紀にあらわれた塋室墓と石室墓の構造を維持しながら、新しい要素がみられるようになる。塋室墓ではこれまでのアーチ天井を基本構造とする墓にかわって、前室、または前室と主室の両方がドーム天井となる墓が出現する。また、この地域ではそれまでみられなかった主室の平面プランが胴張りの塋室墓も出現することは興味深い変化である。一方、石室墓では多室化がさらに進む。しかし、石室墓や一部の塋室墓では、3世紀後半においても紀元前後の単室墓にみられた主室内部奥(被葬者の頭側)に副葬品を配置するという、この地域における墓室内部空間利用の伝統が持続している。このことは、中原に比べて塋室墓へのドーム天井導入が遅れることとともに遼陽・瀋陽地域の大きな地域的特徴といえるだろう。

このように後漢時代から三国時代にかけての遼陽・瀋陽地域の墓制は中原の墓制の影響を受けながらも、この地域独自の展開をみせる。一方で、この地域においては単室の塋室墓が遼陽地域・瀋陽地域ともに分布するのに対して、石室墓の分布は遼陽地域から瀋陽地域南部までに限定され、瀋陽地域北部は塋室墓のみとなっており、さらに小さな地域性がこの地域内に存在することを示している。

なお、墓内部の奥側、すなわち被葬者の頭側に副葬品を配置するというこの地域における漢代墳墓の内部空間利用の特徴は、春秋戦国時代の燕国の墓においても認められるものである。そして、燕国が遼寧地域に進出した紀元前4世紀以降に造営され、近年発掘調査報告が相次いでいる遼寧地域の燕国墓でもこの特徴は同様にみられる。このことから、遼陽・瀋陽地域の漢代墳墓にみられるこの墳墓内部空間利用の地域的特徴は、春秋戦国時代の燕国の墓制に由来する可能性が高いといえそうである。

遼陽・瀋陽地域の陶製明器に関しては、調査を行った遼陽周辺の墳墓出土資料である東大所蔵資料は、形態や製作技法の特徴から2世紀から3世紀にかけての時期の墓に副葬されたものであることがわかった。出土した墓は塋室墓と石室墓であり、同時期の塋室墓と石室墓に副葬される陶製明器は、器種のほか、各明器の製作技法も相互に共通することが判明した。このことは陶製明器においても石室墓と塋室墓の関係性の強さを示すものであり、國學院大學博物館が所蔵する遼寧省鞍山周辺漢代墳墓出土の陶製明器の調査においても同様のことが確かめられた。

## B) 遼東半島における漢時代の墓制について

本研究では、東京国立博物館に所蔵される後藤守一らによって1931年に調査された遼東半島にある遼寧省営口市蘆家屯周辺漢代墳墓の出土資料を調査した。そのうち蘆家屯三号磚(埴)墓出土資料の調査成果については、すでに発表を行っている。その調査成果を交えつつ、遼東半島の漢代の墓制について以下に述べる。

遼東半島では、漢代に多様な墓制が展開した。遼東半島における漢代墳墓で最も特徴的なのは貝殻を構築材として用いる墓である。貝殻を構築材として用いる墓には、貝殻を墓坑の壁と木槨や木棺の間に充填する貝墓、貝と石を混用して墓坑の壁と木槨や木棺の間に充填する貝石墓、そして貝と埴を墓坑の壁と木槨や木棺の間に充填する貝埴墓がある。これらの墓は、渤海沿岸に広く分布し、遼東半島でもこれまでに数多く調査されている。一方で、遼東半島には、そのほかの地域にも一般的にみられる埴を用いて墓室を作る埴室墓のほか、石室墓や甕棺墓も少数存在している。このうち、埴室墓は墓室構築の際に無文または縄文のみの埴で構築する墓と、構築の際に文様埴や文字埴も使用する墓がある。また、墓室内に壁画を描く埴室墓も存在している。本研究で調査を実施した東京国立博物館所蔵資料が出土した蘆家屯三号磚墓は、無文の埴で構築された埴室墓である。

遼東半島における漢代墳墓の調査は、19世紀末の鳥居龍蔵による調査にまでさかのぼり、鳥居による最初期の調査の際に、すでに上で述べたような遼東半島における漢代墳墓の多様性が認識されていた。その後、20世紀前半期にかけて日本人研究者によるこの地域の漢代墳墓の調査が相次ぐが、蘆家屯三号磚墓も多様性に富む遼東半島の漢代墳墓の実態を知ることのできる一つの墓として、発掘調査の対象となったものと考えられる。

その後、中華人民共和国成立後には、遼東半島の各種の墓制の漢代墳墓の発掘調査がさらに進み、これらの墓制と陶製明器をはじめとする副葬品の年代的な位置づけの大枠も明らかになってきた。とくに2000年代に入って調査された大型墓群である遼寧省普蘭店市姜屯漢墓の発掘成果はこの地域における前漢時代から後漢時代にかけての墳墓の編年を考える際の基準となるものであり、姜屯漢墓の調査成果をもとに遼東半島における漢代墳墓編年の概要を以下のように示すことができる。

前漢前期～後期	竪穴土坑墓(貝墓を含む)
新～後漢初期	竪穴土坑墓(貝墓を含む)・埴室墓
後漢前期	埴室墓
後漢中期～後期	埴室墓(この時期に文様埴を使用する墓が出現)

このように、遼東半島では前漢時代から後漢時代にかけて、貝墓を含む槨墓(竪穴土坑墓)から室墓(埴室墓)へという中原と軌を一にした墓制の変化を確かめることができる。そして、この地域への室墓の導入時期は新代から後漢代の最初期においてであり、その後は埴室墓のみとなるのがわかる。このことから、今回資料調査を実施した埴室墓である蘆家屯三号磚墓の年代は、新代から後漢代にかけてであると想定でき、さらに蘆家屯三号磚墓出土の陶製明器を近隣の漢代墳墓出土の陶製明器と比較した結果、墓の年代は2世紀後半頃であることが判明した。

なお、蘆家屯三号磚墓出土の陶製明器は、東大所蔵資料とほぼ同じ時期の明器である。遼東半島の蘆家屯三号磚墓出土陶製明器と遼陽周辺の墳墓から出土した東大所蔵資料とを比較すると、器種レベルでは共通するものが多いが、同じ器種であってもその形態や製作技法には違いが大きい。このことは墓制のみならず陶製明器においても、遼寧地域内により小さな地域性が存在していることを表している。

以上が、本研究における成果の概要である。遼寧地域における漢代の墳墓について、これまでの発掘調査成果のデータと、東大所蔵資料をはじめとする陶製明器の実見調査を総合させ、遼寧地域における漢代墳墓の内部構造と主たる副葬品である陶製明器に関して、その変遷過程と特質を把握することができた。

一方で、2020年初めからの新型コロナウイルス感染症の世界的流行によって、海外への渡航が実質不可能となってしまったため、当初予定していた中国での現地調査を、本研究実施期間の後半は全く実施できなかった。今回それに代わって重点的に調査したのが、日本国内の研究機関が所蔵する20世紀前半期に日本人研究者によって発掘された遼寧地域の漢代墳墓出土資料である。これらの日本国内の研究機関が所蔵する資料と、近年急速に蓄積が進んでいる中国の研究機関による調査で出土した資料との実見による比較調査が、今後さらに研究を深化させるための課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 石川岳彦・市元壘	4. 巻 691
2. 論文標題 蘆家屯3号磚墓 館蔵遼東出土資料の研究(1)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 MUSEUM	6. 最初と最後の頁 7-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川岳彦	4. 巻
2. 論文標題 中国遼寧地域の漢代墳墓をめぐる諸問題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本中国考古学会 2019年度総会・大会 予稿・要旨集	6. 最初と最後の頁 76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川岳彦	4. 巻
2. 論文標題 燕国釜的編年研究与東亜地区的瓮棺葬	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 瓮棺葬与古代東亜文化交流研究: 瓮棺葬与古代東亜文化交流 国際学術研究会論文集	6. 最初と最後の頁 99-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 石川岳彦	4. 巻 144
2. 論文標題 春秋戦国時代の燕国の拡大と東北アジアの変容	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 97-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石川岳彦
2. 発表標題 中国遼寧地域の漢代墳墓研究の現状と課題
3. 学会等名 東北亜細亜考古学研究会 例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石川岳彦
2. 発表標題 中国遼寧地域の漢代墳墓をめぐる諸問題
3. 学会等名 日本中国考古学会 2019年度総会・大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------